千葉の園芸

発行所　千葉市中央区市場町１－１
公益社団法人千葉県園芸協会
連絡先　０４３（２２３）３００５
発行日　毎月１日
令和７年３月号

つながる！ひろがる！農福連携（ノウフク）

千葉県農林水産部担い手支援課
経営体育成班　主査　藤城　圭輔

「農福連携（ノウフク）」は、障がいのある方が農作業などで活躍することにより、担い手不足や高齢化が進む農業分野では働き手の確保に、障がいのある方にとっては就労や生きがいづくりの場になるなど、双方の分野にさまざまなメリットが生まれる取組のことです。

１．千葉県が進めるノウフクの仕組み

ノウフクには、福祉事業所が農業に参入する場合や、農業者が障がいのある方を直接雇用する場合などいくつかの方法があります。千葉県では、取り組みやすい方法の一つとして、農業者が福祉事業所に農作業の一部を委託する取組を支援しています。

・繁忙期のみ働き手を確保したい農業者でも導入しやすい方法です。
・福祉事業所の職員が、障がいのある方を引率して現場に伺い、特性に合わせた指示と支援により作業します。
・屋内での作物の洗浄や袋詰め作業、収穫後の畑の片付けなど、障がいのある方それぞれの特性に応じて作業ができます。

２．実際に取り組んだ方の声

≪農業者≫
・慣れてくるとにこにこと笑顔で来てくれるので、作業場の雰囲気が明るくなった。
・時間はかかるが、手順を覚えると精いっぱい作業してくれて仕事がはかどった。

≪福祉事業所≫
・農業には障がいの特性に応じて行えるさまざまな作業があると感じた。
・農作業を楽しみ、やりがいをもって作業していた。

農福連携に取り組んだ農業者の中には、障害のある方が働きやすいように作業工程や環境を整えることで、従業員全体の作業環境の改善や作業効率の向上にも繋がり、経営規模を拡大した例もみられています。

３．「ノウフクひろげる！」ための県の取組

①農福連携実証試験「お試しノウフク」

令和２年からの５年間で 30 件以上の作業（日本梨の剪定枝を拾う作業や枝豆の選別作業、カブの黄色くなった葉を取り除く作業など）を実証し、①障害のある方ができる農作業の内容、②作業に対する適切な工賃の計算方法、③福祉事業所から作業場所までの距離などを検証し、事例を積み上げているところです。

枝豆の選別作業の様子

②農福連携啓発セミナー、現地研修会

農業者や福祉事業所の職員等を対象に農福連携の取組事例等を紹介することで理解を図るセミナー、農福連携の実践事例を学ぶ現地研修会などを開催しています。

③「ちば農福連携マルシェ」の開催

農福連携の取組を広く知っていただき、障害のある方の工賃向上につなげるため、農福連携によって生まれた農産品や加工品の合同販売会を開催しています。

この他、県ホームページでは農福連携の紹介動画やガイドブックを掲載しています。

野菜ニュース

さつまいも協議会における担い手育成・確保の取組

公益社団法人千葉県園芸協会
産地振興部　副主幹　熱田　圭佑

（公社）千葉県園芸協会のほか、県や全農千葉県本部、関係ＪＡ等で構成される千葉県さつまいも協議会では、喫緊の課題となっている担い手育成・確保の取組を進めています。今回は、令和６年度に実施した２つの取組について御紹介します。

１．はじめに

農業の担い手不足が叫ばれて久しいですが、それは近年販売単価が好調なさつまいもにおいても例外ではありません。大規模生産者・法人の規模拡大や新規参入はあるものの、後継者がいない生産者が多いことなどから、生産者数や作付面積は減少傾向が続いており､関係機関及び産地の生産者において、担い手不足に対する危機感が高まっています。

一方で令和３年以降、関係機関が連携してさつまいもの産地強化と新産地育成を進めてきた結果、県内各地でさつまいもに取り組む若手生産者が増えてきました。そこで、さつまいも協議会では、県内の若手生産者を結び付け、互いに高めあうための「若手生産者研修会」を令和５年度から開催しています。

このたび、令和６年度の若手生産者研修会と、新規就農者支援の先進事例である「長生農業独立支援センター」への視察を行いましたので御紹介します。

２．若手生産者研修会

令和６年 10 月 30 日、令和６年度の第１回研修会を(株)芝山農園及び JA かとり栗源支店で開催しました。今回は初の試みとして、茨城県・埼玉県の生産者と関係機関にも声を掛けた結果、県外から参加した８名の生産者及び関係機関を含む 77 名の一大研修会となりました。当日は、省力機械（自動高さ調整つる刈機）の実演、新品種（あまはづき、ひめあずま)の食べ比べ､空洞症に関する情報提供、情報交換会と、盛りだくさんの内容でした。

写真１ 自動高さ調整つる刈機実演の様子

また、令和７年２月 14 日、第２回研修会を JA かとり栗源支店及び(株)ローソンファーム千葉現地ほ場で開催し、29 名の若手生産者を含む 61 名が参加しました。当日は、農地における境界木等の代替として注目されている「地中マーカー」と、生育中の草勢を判別できるセンシングドローンの実演を行い、その後情報提供及び情報交換会を行いました。

３．長生農業独立支援センター視察

令和７年１月 30 日、さつまいもにおける新規就農者の研修受入体制整備について検討するため、令和元年から JA 及び自治体が連携して新規就農者を支援している長生農業独立支援センターを視察しました。

当日は、センター長及び JA 長生の担当者のほか、実際に支援センターの支援を受けて就農した新規就農者の方から、これまでの経緯や苦労したこと等についての貴重なお話を伺うことができました。実際には様々な苦労・ハードルは想定されますが、問題解決に向けて関係機関が密接に連携することが重要であることが認識できました。

写真２　長生農業独立支援センターとの情報交換

４．今後に向けて

新規就農支援体制の検討はまだまだこれからであり、課題は山積しています。担い手の確保・育成により千葉県のさつまいもが更に発展できるよう、今後も関係機関で知恵を出し合い、取組を進めてまいります。

産地の動き

東葛飾・北総地域新規いちご生産者研修会の開催～新規いちご生産者たちが地域を越えて学び合う！

千葉県東葛飾農業事務所　改良普及課
普及指導員　武内　理香

新規いちご生産者の知識・技術の習得や、生産者間で新たなネットワークの構築を進めるために、「東葛飾・北総地域新規いちご生産者研修会」を開催しています。
本研修会のこれまでの取組内容を御紹介します。

１．活動の背景

近年、東葛飾・北総（印旛）地域では、都心からアクセスがよく消費者に近い立地を生かして、直売や観光用のいちご栽培に、新たに取り組む新規就農者や後継者が急増しています。

その一方で、当地域でいちごの組織的な活動を行う機会は少なく、新規にいちご栽培に取り組む生産者が点で孤立し、知識・技術を習得しにくい状況にありました。

そこで、東葛飾・北総地域で新たにいちご栽培に取り組む生産者を対象に、栽培技術の習得と地域の垣根を越えたネットワーク構築を促すために、「東葛飾・北総地域新規いちご生産者研修会」を開催しています。

２．「主体的で学びやすい」研修会の実施

本研修会は、いちご栽培を始めて５年前後の20代～40代の生産者31名を対象として実施しています。取組初年度（Ｒ５年度）は、「いちごの基本的な栽培技術と知識を学ぶ、仲間と出会う」ことをテーマに、経験が浅い生産者でも徐々にステップアップや仲間作りができる内容となるよう心掛け、栽培や経営の基本となる座学やグループワークなど、技術と知識を深める研修会を中心に実施しました。

２年目（Ｒ６年度）は、「生産者同士の交流を深める、互いのほ場を知る」ことをテーマに、生産者が主役となり、自身の経営概要を説明する相互訪問や労働力補完方法について学ぶ労働力研修、互いの経営方針や研修内容について協議し合う座談会を中心に開催しました。（全 13回、延べ参加人数182名）

研修会を受講した生産者からは、「この研修会で知識も人との繋がりもできて、沢山学ぶことがあります」、「悩み相談や情報交換の場としてとても有意義です」などの前向きな声が聞かれています。

また、生産者同士で互いのほ場を行き来する機会や比較的栽培経験のある生産者が経験の浅い生産者の相談相手となり、技術を教え合う機会も多く見られるようになりました。ライバルだけれども、互いを助け合い、切磋琢磨しながら知識を得ようとする自発的な意欲が高まり、技術習得のみならず、地域の垣根を越えたネットワークの構築が進みました。

相互訪問で互いの経営状況を学ぶ

３．新たな学習グループの誕生

研修会を通じて、生産者の意欲を引き出し、ネットワーク構築を進めることで、「この研修会で出会った仲間同士でグループを作りたい」という意思が芽生え、生産者自らが発起人となり、新たな学習グループ「アーバンいちご研究会」が誕生しました。気軽に交流と情報交換ができるよう、規約や役職のないフラットな繋がりを意識し、生産者の主体性を活かしたグループ活動に繋げていきます。

４．今後の活動について

新規いちご生産者の育成を進めていくためには、自発的な活動が必要になってきます。本研修会をさらに発展させていくために、知識と技術習得を図るとともに、生産者が主体となったグループ活動の活性化を進めていきます。

重粘土質に適応したイチゴ畝連続利用栽培技術の開発

千葉県農林総合研究センター　暖地園芸研究所
野菜・花き研究室　研究員　曽我　みちる

イチゴの「畝連続利用栽培」は、一度立てた畝を栽培後も崩さずに次作以降も再利用する方法で、毎年の畝立てに要する時間の削減が可能です。南房総地域特有の重粘土質土壌においても適用でき、排水性の改善も期待できます。

１．はじめに

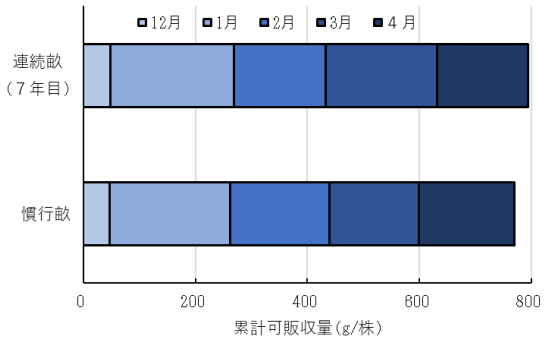
千葉県のイチゴ生産は､令和４年の産出額が87億円で全国９位の重要な品目です。南房総地域では、イチゴの観光摘み取りや直売が多く、主要な観光資源となっています。一方で、近年では生産者の高齢化や担い手不足を背景に作付面積が縮小しており、産地の維持に向けて省力化技術の開発が求められています。

そこで、省力化が期待される「畝連続利用栽培」について、未実証の南房総地域特有の重粘土質に合わせた栽培方法を開発しましたので紹介します。

２．畝連続利用栽培とは

「畝連続利用栽培」では、栽培終了後の株を根元から切り取り、畝を崩さずにビニルを被覆して太陽熱消毒を行い、消毒後に植穴を開けて次作の苗を定植します。平成 31 年～令和４年の栽培試験期間において、畝を崩さずに太陽熱消毒を行っても、栽培期間中に萎黄病や線虫被害は発生しませんでした。また、重粘土質土壌では水はけの悪さが生育を抑制する問題となります。一方で「畝連続利用栽培」は作土層の気相の割合が増加することで透水性が改善することが報告されており、実際に水はけの悪い重粘土質のほ場で試験した結果でも、慣行栽培と比較して深さ約30cmから40cmの下層で排水が良好になることで根の活性が高められ、畝下部まで根が伸長しました（写真)。

さらに、９年間連続して利用した畝でも、太陽熱消毒を毎年行うことで土壌伝染性病害や線虫被害は発生せず、畝土壌内の塩類の過剰な集積も起きなかったことから､「畝連続利用栽培」は長期にわたり安定したイチゴ生産が可能な栽培方法と言えます。



（図）連続畝と慣行畝における１株当たりの月別累計可販収量（令和２年度）

３．畝連続利用栽培のかん水・施肥管理

かん水管理はタイマー制御により、１日１回のかん水を行いました。施肥は、基肥を施さずに液肥混入器を用いるかん水同時施肥を行い、生育ステージに応じて液肥濃度やかん水量を調整しました。かん水量は、土壌の pF 値を指標とし、イチゴの生育に合わせて pF1.8～2.4 の範囲とすることで、栽培初期から後半まで土壌水分の適切な維持が可能でした。この方法により、現地慣行品種の「やよいひめ」を供した結果、連続利用７年目においても慣行と同等の生育、収量（図）及び糖度が得られました。

４．まとめ

実際に、「畝連続利用栽培」により、従来の施肥作業や耕うん作業が大幅に削減され、慣行栽培と比較して年間作業時間を約60時間短縮可能でした。ただし、初期費用が慣行栽培と比較して高くなることに注意が必要です。南房総地域特有の水はけの悪い重粘土質土壌でも対応可能で省力化が図れることから、イチゴ産地維持に向けての普及が期待されます。

（写真）７年間連続利用した畝の断面（令和３年度）

外国人も注目！成田空港で植木を展示・ＰＲ

千葉県農林水産部生産振興課　園芸振興室

本県は全国有数の植木産地で、海外への輸出も盛んです（12 億円（令和５年）。県生産振興課調べ）。また、本県では、代々伝わる枝を曲げたり樹冠を整える樹芸技術で形作られた造形樹が多く生産され、日本庭園などで見る人の心を魅了しています。

こうした本県植木の伝統技術や魅力を国内外に発信し、国内外の植木の需要拡大を図るため、生産者団体と協力し、成田国際空港ターミナル内において本県植木を用いた日本庭園を展示しました。また、展示期間中は同会場において本県植木の PR 動画を放映しました。

さらに、展示期間中の１月 31 日には伝統技術の実演会を開催し、匝瑳市植木組合の生産者が卓越した技を披露しました。

場　所：成田空港第１ターミナル４階（出発階）
期　間：令和７年１月 25 日～２月３日
施　工：匝瑳市植木組合

今回の展示及び実演会では、記念写真を撮ったり、展示された造形樹について質問する外国人が多くみられ、植木や伝統樹芸に対する関心の高さが窺えました。県では、今後も県産植木の魅力発信などに取り組み、県産植木の需要拡大につなげてまいります。

「環境にやさしい農業」の取組をＰＲしました

千葉県農林水産部環境農業推進課　みどり・耕畜連携推進室

県では、JA グループ千葉営農事業推進協議会及び JA 千葉中央会等と連携し、令和６年 10 月 12 日、JA きみつ味囲楽さだもと店で開催された「JA グループ千葉 県産農産物応援直売所キャンペーン」において、ちばエコ農産物及びもっと安心農産物の PR を行いました。

当日は、ちばエコ農産物やもっと安心農産物の取組を知っていただけるよう、直売所を利用するお客様に対し、簡単なクイズを行うとともに、ちばエコロゴマーク入りエコバッグ等をプレゼントしました。お客様からは、「環境にやさしい農業の取組がよく分かった」「これからロゴマークを探してみたい」といった声をいただきました。

県では、今後もちばエコ農産物等の「環境にやさしい農業」の推進と PR に取り組んでいきます。

ちばの園芸高温対策緊急支援事業について

千葉県農林水産部生産振興課　園芸振興室

夏季の気温が急速に上昇し、県内の園芸作物に被害が出ている状況を踏まえ、令和７年度の新規事業として「ちばの園芸高温対策緊急支援事業」を措置しました。本事業により高温対策に資する機械・装置等の導入に対し助成します。

１．事業主体

認定農業者、認定新規就農者等

２．補助率

1/3 以内

※ 低コスト耐候性ハウス等に導入する場合に限り 1/2 以内

自動かん水装置

遮光ネット

３．補助対象

かん水や換気・空気冷却、遮光・遮熱に効果のある機械・装置等

※　塗布型遮光材、井戸の設置、既存の機械・装置等の更新等は対象外となります。

事業の申請先は、県農業事務所企画振興課となります。事業の活用を検討される場合は、最寄りの農業事務所企画振興課へ御相談ください。

住所地の市町村	県農業事務所	電話番号
千葉市、習志野市、市原市、八千代市	千葉農業事務所	043-300-1985
市川市、船橋市、松戸市、野田市、柏市、流山市、我孫子市、鎌ケ谷市	東葛飾農業事務所	04-7143-4122
成田市、佐倉市、四街道市、八街市、印西市、白井市、富里市、酒々井町、栄町	印旛農業事務所	043-483-1129
香取市、神崎町、多古町、東庄町	香取農業事務所	0478-52-9192
銚子市、旭市、匝瑳市	海匝農業事務所	0479-62-0156
東金市、山武市、大網白里市、九十九里町、芝山町、横芝光町	山武農業事務所	0475-54-1122
茂原市、一宮町、睦沢町、長生村、白子町、長柄町、長南町	長生農業事務所	0475-22-1751
勝浦市、いすみ市、大多喜町、御宿町	夷隅農業事務所	0470-82-4956
館山市、鴨川市、南房総市、鋸南町	安房農業事務所	0470-22-7131
木更津市、君津市、富津市、袖ケ浦市	君津農業事務所	0438-25-0107

第７回房総ジビエコンテスト及び房総ジビエフェア２０２５の開催報告

千葉県農林水産部農地・農村振興課　農山漁村発イノベーション班

千葉県では、野生鳥獣対策の一環として、県内で捕獲され、県内の食肉処理加工施設で適切に処理・加工されたイノシシやシカの肉を「房総ジビエ」と銘打ち、消費拡大を図っています。
今年度開催した「房総ジビエコンテスト」及び「房総ジビエフェア」の開催結果を報告します。

【第７回房総ジビエコンテスト】

今年度は、「サステナブルでおいしいジビエ料理」をコンセプトにコンテスト（１月）を開催し、26作品の応募がありました。

最優秀賞
（千葉県知事賞）

作品名：猪のぬか炊き-未来への一皿-
店　名：酒亭穂椋（東京都港区）
氏　名：岡田　東司

優秀賞
（千葉県農林水産部長賞）

作品名：山容水態と発酵
～千葉県産猪肉の獅子頭と
季節野菜の発酵唐辛子煮込み～
店　名：（株）ラムラ
過門香銀座本店（東京都中央区）
氏　名：須田　広樹

【房総ジビエフェア２０２５】

県内外の店舗63店（※１）が参加し、多彩な房総ジビエ料理や商品を提供・販売する「房総ジビエフェア２０２５」を、令和７年１月20日から２月28日まで開催しました。

フェア期間中に、参加店舗で対象の房総ジビエ料理や商品を1,000円以上注文・購入し、アンケートに回答後、応募した方の中から抽選で50名に県産品等をプレゼントしました。

※１：フェア開始時点の情報です。フェア期間中に参加店舗が増減した可能性があります。

最新情報はこちらで御確認下さい。→
URL： https://bosogibier.com